別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　　第　　号

氏　　名　　野 村　　駿

論　文　題　目

若者の夢追いライフコース形成に関する社会学的研究

―バンドマンを事例として―

論文審査担当者

主　査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　　伊藤彰浩

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授　内田　良

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　　渡邉雅子

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の目的は、「音楽で成功する」という夢を掲げ、その実現に向けて活動するロック系バンドのミュージシャン（以下、バンドマン）を事例に、夢追いの選択・維持・断念から成る夢追いライフコースの形成過程を明らかにすることである。特に若者文化の影響に着目し、若者を夢追いへと駆動させるメカニズムについて検討する。そしてその際には 1990 年代以降に顕著となった 2 つの社会変化に着目した。1 つは、教育の文脈における変化であり、学校教育において子どもの「やりたいこと」や「将来の夢」を重視する方向性が提起されたこと、もう 1 つは、労働の文脈において、不況を背景に学校から職業への移行が不安定化したことである。

本論文は、この 2 つの社会状況の結節点に若者の夢追いという現象を位置づける。つまり、一方で教育の文脈では、夢を持つことや追うことが積極的に承認されるからこそ、夢追いという進路は導かれやすくなる。他方でそれは不安定就労という形での移行を促進させ、教育と労働の狭間で不安定な移行を伴いながらも積極的に選択されるのが夢追いというライフコースなのである。では、なぜ若者は先行き不透明な現代社会において、夢追いという進路を選択するのか。また、離学後には、なぜ夢を追い続け、いかなる契機によって夢を諦めていくのか。夢追いの選択・維持・断念から成る夢追いライフコース形成のプロセスとその析出メカニズムを明らかにすることが本論文の主たる研究課題である。

第 1 章では本論文の位置づけを明確にすべく、若者の夢追いに関連する先行研究の検討を行った。その結果、課題として次の 3 点を指摘した。①実際に夢を追う若者の実態が明らかでないこと、②特に夢追いライフコースの維持や断念に関する検討が十分でないこと、③若者文化が持つ固有の影響が検討されていないことである。そして、演劇やスポーツ等の文化実践に関する研究を参照して、ロックバンドという若者文化が個人のライフコース形成を規定するという本論文の視点を明確にし、分析枠組みを設定した。最後に、本論文で使用するデータ（2016～20 年に実施された 35 名のバンドマンへの聞き取り）の特性と調査の概要について述べた。

第 I 部（第 2 章～第 4 章）では、夢追いライフコースの選択段階を検討した。バンドマンたちは、家族の影響を受け、また部活動等を契機に音楽活動を開始させ、音楽に中心化された進路形成に至る。そして、学校外部のライブハウスを中心とした人間関係に深く埋め込まれ、「自分のやりたいことがバンド活動である」、「自分にはできる」と思えることで、夢追いライフコース選択に踏み切っていた（第 2 章）。

加えて、バンドという若者文化固有の影響も確認された。つまり、活動形態の集団性が、メンバー間の相互行為を通して、夢追いを規定していた。まず、個人の夢を超えて、バンドとしての夢が共有され、集団としての夢追いが可能になるとともに、その破綻によってバンドの解散が生じていた（第 3 章）。また、夢追いに伴う雇用形態

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

の選択においても、集団で活動するがゆえに、他のメンバーとのスケジュール調整が容易なフリーターが積極的に選択され、それを肯定する支配的な文化の存在も明らかとなった。同時に、フリーターを選択しなかったバンドマンの事例も検討することで、夢追いのオルタナティブの可能性と困難を考察した（第４章）。

第Ⅱ部（第５章～第６章）では、夢追いライフコースの維持段階を検討した。バンドマンの夢は多様である一方で、その中身や語られ方には一定の共通性が確認できる。そこで、夢の中身と語られ方に焦点を置いて、その変化の方向性から夢追いライフコースが維持されるメカニズムを分析した（第５章）。明らかになったのは、夢の語られ方が「音楽で売れる」を臆面もなく語るものから具体的かつ段階的に夢を語るものへと変化していることである。そして、その背景には、ライブハウス共同体におけるバンド仲間の存在があり、自らの状況に合わせて選択的に参照するバンド仲間を変えることで、夢を追い続けられる状況が作り出されていた。

一方、バンドマンの周りには、夢追いを否定する者もおり、また多くの失敗・挫折経験もある。次に、こうした否定的経験のもとで、なおも夢が追い続けられるメカニズムを検討した（第６章）。まず、家族との相互行為に着目して、その関係性如何にかかわらず、夢を追い続ける動機が独自の解釈実践によってもたらされていること、そして、正規雇用へと促す否定的な作用に対しては、明確な抵抗姿勢がとられていることも述べた。これらの背景には、共通して夢追いを肯定する者しかいないライブハウス共同体の存在があり、そこに準拠することで、共同体外部からの否定的な作用に抗し、その内部においては、バンド仲間との競争意識が醸成されることで、夢追いライフコースは不断に維持されていた。

ただし、バンドマンの多くは、いずれかのタイミングで夢を諦めていく。第Ⅲ部（第７章～第８章）では、夢追いライフコースの断念段階を検討した。まず彼らが夢を諦めることをどのように捉えているのかを分析し、バンド活動への意味づけが重要なポイントになっていることを確認した。そして、実際に夢を諦める旨が語られた３名の語りから、自己納得を伴って夢を諦めるプロセスを検討した（第７章）。明らかになったのは、「家族」「若者文化」「労働」の複合的作用である。つまり、それらは、夢追いライフコースの選択・維持を規定しながら、結婚や正規就職といったライフイベントを契機として、反対に夢追いライフコースの断念を導いていた。個々の状況に応じて、共通の要因が、夢を追わせる方向にも、夢を追わせない方向にも作用していたといえる。

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

次に検討したのは、さまざまな問題に直面する中で夢が追えなくなり、非意図的に夢追いライフコースの中断や断念が析出されるメカニズムである（第８章）。バンドマンたちは、標準的ライフコースの正当性を理解し、かつ自分が非標準的な夢追いライフコースをたどっていることを自覚し、それゆえ将来への不安を強く感じていた。しかし、だからこそ、常に自分の正当性を提示せざるを得ず、その結果として夢追いに過剰なまでに専心し、多くの身体的・精神的問題を抱え、それらの問題は「やりたいこと」をやっている自らの責任として引き受けられた。標準的ライフコースの規範性による抑圧と、それへの抵抗および自らの正当化の実践として、過剰な夢追いへの専心が導かれ、その結果として身体的・精神的問題が自己責任のもと蓄積された結果として、夢追いライフコースの意図せざる中断・断念が析出されていたのである。

終章では知見の総括として、夢追いライフコースの選択・維持・断念メカニズムをそれぞれ整理した。そして、若者文化の影響力に着目して、夢追いライフコース形成の軌道を考察した。最後に、本論文のインプリケーションとして、第８章で明らかとなった夢追いに伴う問題状況の考察から、標準的ライフコースに限られない、多様な生き方を承認する規範理論が必要であることを指摘した。

以上のような本論文の内容は、(1) バンドマンのライフコースに関わる初の本格的な研究であり、かつ (2) 若者の夢追いについての実証的研究という未開拓の研究領域を切り開くパイオニア的研究として、大きな学術的意義をもつと評価される。さらに (3) 学校教育におけるキャリア教育などで近年強調されている生徒たちの夢を重視する傾向性への学術的かつ実践的なインプリケーションも少なからず有している。加えて (4) 三十数名のバンドマン達の語りを、ほぼ一貫して本人達の視点にたって捉えることで、彼らの内面世界をいきいきと描き出せていることも、本研究の大きな貢献である。

一方、論文審査委員からは以下のような指摘や質問もなされた。(a)若者の夢追いの特性は時代によって違っているのではないか。そのなかで今日の夢追いのもつユニークさとは何なのか。(b)夢追いに対する学校教育のもつ影響の位置づけがいまひとつ弱いのではないか。(c)ジェンダーや社会階層・階級といった視点を取り入れてもよかったのではないか。(d)夢追いの断念の段階の説明が、構造的要因によって主に説明され、主体の側への視点がやや弱いのではないか。

こうした指摘や質問に対し、学位申請者はおおむね適切な回答を述べるとともに、論文の問題点も十分に理解し、今後の研究課題として取り組む旨を述べた。以上の質疑の結果、本論文は夢追いライフコースに関する重要な学術的知見をもたら

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

すものと認められた。

　よって、審査委員は，全員一致して本論文を博士(教育学)の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。